

## バンヴェニストからマリノフスキーへ、 あるいは発話行為概念の境界

小野 文

■発話行為 (énonciation) 概念の最終的な位置づけをはかり、しかも様々な理由から一つの言語学の幕開けを告げるテキストと見なされるようになった、エミール・バンヴェニスト (Émile Benveniste 1902-1976) の論文「発話行為の形式装置 L'appareil formel de l'énonciation」(1970)<sup>1</sup>には、彼の普段の文体には見られない、非常に長い引用がある<sup>2</sup>。それは論文の終わり近く、対話の構造の問題に触れるうちに突如として現れる。引用されるのは人類学者ブロニスラウ・マリノフスキー (Bronislaw Malinowski 1884-1942)<sup>3</sup>であり、問題となる文献は、今や言語学の古典となったオグデンとリチャーズの『意味の意味』に補論として付けられた、「原始言語における意味の問題」(1923)<sup>4</sup>である。この論においてマリノフスキーは、「話しかけによる交感 phatic communion<sup>5</sup>」という新しい概念を提出し、「情報を伝えるのではなく、社会的機能を果たすことだけが目的だけの」ことばの存在を報告するのである。報告する、と言ったが、彼はここで「原始言語」<sup>6</sup>にだけ見られる特徴を語っているのではない。どこの社会でも日常的になされる天気の話、たわいのないおしゃべりを指して言っているのである。その意味では「話しかけによる交感」は、今まで見えていなかったことばの一般的な一機能<sup>7</sup>を明るみに出したのだ。50年近い歳月の後、マリノフスキーが「話しかけによる交感」を詳述する文章を、バンヴェニストはここでそのまま引用している。

このバンヴェニストの論文は、ツヴェタン・トドロフが「発話行為 L'énonciation」という特集タイトルのもとに準備した雑誌『ランゲージュ Langages』17号に載せられることになるが、その巻頭にトドロフは導入となる論文を載せ、次のような文章を残している。

このような見方によってマリノフスキーは、すでに古代から存在した考えを、科学的言説に導入したのだ。つまりことばによる行動がその他の行動と同じものであり、ことばもまた(おそらく)行動なのだ、という考えである。文は意味を持っているが、(行為という)機能も持っているのだ。[中略]

このような見方が、ヨーロッパ諸言語を研究している言語学者よりかは「異国の exotique」社会の研究家のうちに発見できるのも偶然とは言えまい。我々の西洋文明は、ことばが行動であるという考えを拒否してきたのだ。つまり言葉は物の影であり、ことばは思考の表現というわけだ。全ての文は情報を与えるためにあり、そして情報を与えるとは行動ではない。マリノフスキーさえ、この論理の最初の部分にしか異議を唱えない(フロイトにも同じ態度が別の形で見つかる)。「行動する代わりに話す」という考えは、「話すということは行動すること」とい

<sup>1</sup> « L'appareil formel de l'énonciation », *Langages*, 17, 1970, pp.12-18, repris dans *Problèmes de linguistique générale* (以後 PLG), tome 2, 1974, pp.79-88. なお PLG の訳出にあたっては、『一般言語学の諸問題』、岸本通夫監訳、みすず書房、1983年を参照した。これは PLG1 の完訳ではなく、原書28章のうちの21章の翻訳である。

<sup>2</sup> 参考文献を容易に明かさないことで知られているバンヴェニストの文体については、M. Arrivé, *Langage et psychanalyse, linguistique et inconscient*, PUF, 1994, (特に p.50 et p.83), A. Montaut, « La méthode de Benveniste dans ses travaux comparatistes : son discours et son sujet », *LINX*, n°26, pp.108-135 に詳しい。同じく Chiss et Puech もこの長い引用に注目し、マリノフスキーと社会学者 G・タルドを「社会心理学」という用語を導きの糸として近づける試みを行っているが、我々とは目的を異にする(特に第2部の3章を参照のこと)。Cf. Chiss et Puech, *Le langage et ses disciplines*, Duculot, 1999.

<sup>3</sup> このポーランド生まれの英国の人類学者は、メラネシア社会、特にトロブリアンド諸島の社会を機能主義という立場で記述・分析したことで有名であり、またファース、ハリデーという機能主義者、体系文法家に多大な影響を与えていることも付け加えておくべきであろう。なお彼は数々の社会的儀式、特に当時はまだ

う考えよりずっと受け入れやすいのだ (p.4) <sup>8</sup>。

「話すことは行動すること」という考えと、異国社会の研究家を結びつけてみるアイデアは、一見して面白いものに見える。ここでトドロフが指摘している「異国」社会の研究家とは誰を指すのかという問題はひとまず残し<sup>9</sup>、実際マリノフスキーの論旨はいかなるものだったのか、トドロフとバンヴェニストが取り上げている例の論文をもう少し詳しく検討し、その中心となる概念、「話しかけによる交感」がどのような議論の場で生まれてきているのかを見てみよう。

■論考「原始言語における意味の問題」において、マリノフスキーはまず「文化と社会の心理学」をうち立てる必要性を主張する。彼によれば、死んだ言語の研究をする文献学から出発した言語学には、ことばが発せられる場、状況を考えるという視点がなかったのだ。マリノフスキーは、「状況の文脈」を「生きた言語」に適用することで新しい結果が得られるという意見を提示したあと、原始言語においては、ことばは思考の応信信号ではなく、「行為形態(mode of action)」の一つであるととする。ことばは実際的な経験から習得されるものであり、発話(utterance)そのものも、それが生起する状況に左右される。原始的な形態におけることばは、人間活動という背景なしには、そして人間の行動の形態として考えるのでなければ、捉えられないのだ (p.474)。

全ての発話行為は社会的な意図をもつ行為であり、まず思考や情報を伝えるためにあるのではない、というマリノフスキーのテーゼは、「話しかけによる交感」というタイプのことばを考察することで、頂点を見る。彼の定義によれば、これはある話のタイプで、その中においては単なる言葉の交換によって人間の絆が結ばれることになる (p.478)。彼が例として出すのは、沈黙を破って始められる「いい天気ですね」という発話や、それに続く天候の話、特に目的のないゴシップ、とりとめのない経験談などである。これらは話の内容に意味があるというわけではなく、相手と円滑なコンタクトを取るために用いられることばである。ことばが思考を伝えるために使われるのは、文明社会のなかでも高いレベルでのみ見受けられる、じつは稀な使用法なのだ。「話しかけの交感」というタイプのことばについて言えば、「我々の社会」と「原始社会」の差はほとんどない、と一般化しつつ、改めてマリノフスキーは「原始の(primitif)、そして原初の(original)」ことばにおける語用論的性格を強調するのである (p.480)。

さて、このことばの社会行為としての性格を深く分析し、原初の状態にまでさかのぼると何がえてくるか。ここでマリノフスキーは、幼児言語の観察を通してまた一つ、ことばの語用論的性格を指摘する。幼児は意味のない言語音を発することで、社会的行動をとっているのである。もう一歩進んだ発達段階では、幼児がある言葉を発するとき、その言葉は物質化して出てくるかのように認識される(例えば「ママ」と言うときに出てくる母親のように)。つまりことばは「モノの上に及ぼす力」のように幼児には捉えられる。マリノフスキーによれば、ここには「ことばの魔術的力」がある (pp.487-490)。言葉はモノの上に力を及ぼし、モノの性質を帯び、言葉は、それ自体がもつ「意味」と

タブー視されていた性行為の社会的分析を始めた一人でもある。

<sup>4</sup> B.Malinowski, « The problem of meaning in primitive languages », in C.K.Ogden & I.A.Richards, *The Meaning of meaning*, London, 1923, pp.451-510.

<sup>5</sup> 「communion」が宗教用語であることにも注目のこと。問題の論文中、この用語は「phatic communion」という合成語になる前に、すでに「パンをさくこと、食を共にすること」という意で現れる (p.477)。なお、この「phatic communion」は論文のレジュメにおいては「speech in social intercourse」と言い換えて説明されている。

<sup>6</sup> 1923年以降も「原始的・未開primitif」な言語、「primitif」な社会という言い方は言語学でも人類学でも続くが、マリノフスキーの場合には、この「原始言語」は「古い・原初の」という意味を含んでいることに注意したい。後述するが、特に彼が幼児の言語に言及するときには、「幼児言語」と「原始言語」は類似関係に置かれているのである。

<sup>7</sup> ヤコブソンがこれを「話しかけの機能」と言い換えて、ことばの六機能のうちの一つとしたことはよく知られている。バンヴェニストはマリノフスキーを引用したあと、これに言及する数少ない研究として、ヤコブソンの『一般言語学 *Essais de linguistique générale*』(1963)とグレース・ドゥ・ラゲーナの『言葉、その機能と発達 *Speech, its function and development*』(1927, 1963)を参考文献として挙げている (PLG2, p.88)。ラゲーナとマリノフスキーは、お互いにことばの語用論面を強調し、それぞれの著作を参照しあう関係にある。

ほとんど同じである、という考えは、幼児の心理に深い影響を及ぼすとともに、原始社会のうちにも深く根付くことになる。

ここでマリノフスキーは読者を別の著作の中の一章へと導く。それは前年度出版されていた、これも人類学の名著といわれる、『西太平洋の遠洋航海者』(1922)の中の第18章「魔術における言葉の力：いくつかの言語データ」<sup>10</sup>である。この章で人類学者は呪文の言語学的考察を具体的に行っており、その結論部分には「話しかけによる交感」で見られた省察が形を変えて現れることになる。すなわち、「魔術は語りの文体としてできてはいない。それは人から人へと思考を伝えるための手段ではなく、一貫し、筋の通った意味を含むためのものではない。それらは特殊な目的に使われる道具、物の上に作用する力を人に授けてくれる道具であって、意味範囲をいくら広げようと、もしその目的を知らなければ、意味を十分理解することはできない。そこには思考の脈絡というものはなく、お互いに適応する表現があるだけで、それは言ってみれば[・・・]言葉をその目的に向かって投げかける、表現の魔術の秩序に従っているのだ」(p.432)。呪文のなかでは頻繁に、魔術師が現に行っていることが言内容として発せられる。「魚を食べる」といいながら、魔術師は魚を食べるのである。このパフォーマンスは「魚を食べる」という文の意味を希薄にしつつ、魔術の儀式が発話行為としてあることを教えてくれる<sup>11</sup>。魔術を行うことは、魔術を言うこと、つまり呪文という決まり文句を言うことである。「魔術的行為を発話すること」とマリノフスキーは正しく述べている (p.451)。

マリノフスキーがいくつかの著作を通してことばについて考察するとき、その主題は一貫している。それは、ことばの活動が第一義的に「情報や思考を伝える」というものではなく、まず社会状況のなかで発せられる行為である、ということだ。確かにマリノフスキーは、トドロフが先に指摘していたように、「情報を与えること」もまた行為の一つだとは言っていない。しかし「情報を与えることば」は彼の思想のなかでは、ハイレベルかつ数限られたことばにすぎないのだ。ことばの原始の状態、原始言語と幼児言語においては、まず大半のことばが社会的機能を果たしているだけなのであり、ここから我々のことばの原点もまたそのようであることが示される。しかもこの具体的な行為は、モノのように交換されるものであり<sup>12</sup>、また原始状態ではモノ化するもののように捉えられる。以上のような主張は、トロブリアンド諸島の社会分析から得た「話しかけによる交感」と「魔術のことば」の観察によって、マリノフスキーの思想のなかで強固に支えられている。

■ここでもう一度、出発点であるバンヴェニストの論文に戻ってみよう。マリノフスキーが長く引用されるのに対して、それについてのバンヴェニストの注釈は非常に短い。まず「これは「対話」の限界である」としたうえで、「対象も、目的も、メッセージも持たずに、それ自体に帰す発話行為の慣用的形態が個人間の関係を作りだし、保っているのである。これは発話者によって繰り返される、取り決められた言葉による純粋な発話行為である」と彼は述べる (PLG2, p.88)。以上のような簡単なコメントの後、その引用内容に驚いたかのように、バンヴェニストは「この種の言語的交換の形式分析はこれが

<sup>8</sup> T.Todorov, « Problèmes de l'énonciation », *Langages*, 17, 1970, pp.3-11.

<sup>9</sup> もう一つの疑問は、トドロフはバンヴェニストをこの「ヨーロッパ諸言語の研究者」と見なしているのか、ということだ。このトドロフの文章は以下のように続く。「今日、作家や芸術理論家たちは共通して、我々の西洋語を行為や生命から切り離されたものとして扱い、逆に「東洋」言語を、行為や具体的なものと共通な部分を保っているものと見ている」。ここで言われる「異国」とはよって「東洋」を指すのだろうか？ 一方「ヨーロッパ諸言語 *langues européennes*」という概念はその点、曖昧さを残す。

<sup>10</sup> Ch.18 « The power of words on magic—some linguistic data », *Argonauts of the Western Pacific*, John Hawkins and Associates Inc, New York, 1922.

<sup>11</sup> ここではオースティンのスピーチ・アクト論に立ち入る余裕がないが、オースティンがファースを通じてマリノフスキーの著作に接していたことは記憶しておきたい。特に「phatic」という用語の使用法に関しては、マリノフスキーとオースティンを詳しく比較する必要があるが、この小論では扱わない。

<sup>12</sup> 付け加えると、マリノフスキーの考えでは性行為というコミュニケーションもひとつのことばであり、これも一共同体の構成要素を交換するための一つの形態と考えられている。つまりことばとは贈与交換のシステムの一部として捉えられるのだ。

ら為される必要がある」と付け加えたのち、すぐさま論文自体を閉じにかかる。社会的行為としての発話行為について省察が深められることはなく、バンヴェニストは二つの参考文献を残すままである。

しかしこの短いコメントの上には、立ち止まってみる必要があるだろう。「話しかけの交感」タイプのことが、「対話の限界」、あるいは「純粋な発話行為」であるとは、ということだろうか？ 一般的に、バンヴェニストの発話行為概念を考える際、まず彼の「ディスクール論」<sup>13</sup>が手掛かりとされることが多いのは確かである。しかし一方、バンヴェニストが発話行為という概念の境界線をどう引いていたのか、つまり何が発話行為論で扱われ、何が発話行為として認められないのか、という問いを立ててみるのも興味深い。この問いを導きの糸として、我々は発話行為概念の形成過程の一端をも窺うことができるであろう。ここではまず「対話」の境界例としてバンヴェニストが提出していることばの活動を検討する必要がある。

このマリノフスキーの引用に入る前に、バンヴェニストが「対話」の構造を検討しようとしていたことはすでに述べた。彼によれば発話行為には二つの形象、すなわち「源泉」と「発話行為の目的」があり、これはじつは対話の構造なのであって、パートナー同士であるこの二つの形象が発話行為の立て役者となるのである（PLG2, p.85）。つまり発話行為は対話の構造を必要とするのだ。バンヴェニストは「発話行為の外にある対話」「対話のない発話行為」もあるのではないかと、とする反対意見を自ら設定し、それに異議を唱えようとする。前者の例は、「ハイン・テーニ hain-teny」であり、後者の例は「独り言」である<sup>14</sup>。

マダガスカルの子民たちが持つ「ハイン・テーニ」は、バンヴェニストに言わせれば「ことばの応酬」である。この遊戯は、フランスではジャン・ポーランによって翻訳・紹介されたことで有名であり、彼の直訳では「ことばの科学」を指すもので、普段用いられていることばよりもレベルが高いことばの活動と子民人々には捉えられているという<sup>15</sup>。やり取りされる諺は、「権威のある言葉」として引かれ、また長いハイン・テーニの中では、しばしば筋に登場する人物の役割の交換が行われるとポーランは報告している。

「発話行為の外にある対話」の例として出しておきつつ、しかしこれは実際には対話でも発話行為でもない、とバンヴェニストは断定する。「二人のパートナーのどちらも発話しない：全ては引用される諺と、それに対して引用される対諺からなる。議論対象への明確な指向（référence）は一つもない。二人の競技者のうち、諺のストックが多い方、巧みに揶揄を用い、予期しない返答をする方が、相手を返答に詰まらせ、勝利者となる。この遊びはただ対話の外観を持つだけである」（PLG2, p.85）。

つまりバンヴェニストにとって、ハイン・テーニが対話の外観を持つのは、二人の人がことばのやり取りをしているからである。しかし「話しかけの交感」が対話の限界である一方、結局ハイン・テーニが対話と見なされないのはなぜなのだろうか。また、二人のパートナーのどちらも発話したことにさえないのはどうしてだろうか。バンヴェニストは彼にとって当然と思われる答えはあえて口にしないのだが、ここで彼の議

<sup>13</sup> すなわち、指呼詞や時制、遂行文に関する論考である。

<sup>14</sup> 「独り言」に関しては、本論では扱わないものの、バンヴェニストの結論だけを述べておこう。これは「内面化された対話」であり、「内なることば」を使って「話すわたし」と「聞くわたし」が会話するもの、と説明されている。

<sup>15</sup> この「ハイン・テーニ Hain-teny」については、現在こそいくつかの研究がなされているが、バンヴェニストが当時参照できたものは、数少ないと言える。L.Dahle の *Madagascar og dets Beboere*, t.II, Oslo, 1877（ノルウェー語）；J.Paulhan, *Les Hain-teny mérimas, poésies populaires malgaches*, Paris, 1913(3<sup>ed</sup>.1939) がその紹介に努めており、特にポーランはこのハイン・テーニに基づく経験を『諺の経験 L'expérience du proverbe』（1925）という作品にまとめ、1930年には『ハイン・テーニ：難解な詩 Hain-teny : poèmes obscures』という小冊子を出版。また『*Les Hain-teny mérimas*』再版の際にはコレージュ・ド・ソシオロジーでこの主題の下、講演を行っている（1939年）。Cf. Denis Hollier, *Le Collège de Sociologie*, Gallimard(folio), 1979(1995), pp.694-728. バンヴェニストはこのポーランの翻訳・紹介に触れた可能性が非常に強い。ポーランの1913年の著作においてハイン・テーニは「マダガスカル人、特に子民人が用いる民衆詩」と定義され、また1939年の講演では、聖なることば（langage sacré）として考察されている。このハイン・テーニと聖性の問題、またコレージュ・ド・ソシオロジーとバンヴェニストの関係については、別の機会に詳しく述べることにしたい。いずれにせよポーランが「最後まで理解できな

論を補ってみるなら、ハイン・テーニが「発話行為外」なのは、これが話者のことばではなく、決まり文句、諺であるからであり、二人の人が交互に話していても「対話」ではないのは、それが二人の人を必要とすることばの遊戯であるからだ。

「決まり文句は発話行為概念に関わってこない」というこのバンヴェニストの態度は、別のところでも現れている。例えば「ことばにおける形と意味」(1968)<sup>16</sup>という講演の質疑応答の折である。「すでにできあがった文」は記号論領野／意味論領野 (le sémiotique / le sémantique) という対立にどう位置するのか、という疑問に対して、バンヴェニストはこう答える。「問題をはっきりさせるために、わたしはすでにできあがった文の概念、つまり話し手としてわたしが作れるような、即座で自発的で個人的な用法の外にある文に関しては、意図的に扱いませんでした。つまり、言ってみれば、書かれたもので、恒久的で、非個人的な形で固定された発話素材のことです」(PLG2, p.232)。明らかに、バンヴェニストにとって、「すでにできあがった文」「決まり文句」「ハイン・テーニ」は彼の発話行為概念に問題を引き起こすタイプのことばであることが分かる。なぜならこうしたタイプの話は、非個人的で、自発的でなく、発話の状況に即していない文と見なされているからである。

1970年の段階で、「話しかけの交感」に見られる発話行為のタイプは、諺ではなく、また非個人的な発話でもないが、それが「純粋な発話行為」とされているのには訳がある。為される発話自体にはほとんど言語的意味がなく、ただ「発話行為を交換する」という役割が重要であるから、つまり行為面に重点があるからである。「話しかけの交感」は、純粋な「行為」なのだ。なぜそれが「対話の限界」であるのか？ それがほとんど遊戯のように二人の人を結び合わせているからで、ここには「独り言」をする「話すわたし」と「聞くわたし」の間にある対話ほども、情報のやりとりはないのだ。別の面から見ると、バンヴェニストにおける発話行為論の最終段階を示す1970年の論文では、発話行為の概念は以下のように捉えられていることになる。すなわち、「一般的な」発話行為は言語的意味をもち、個人的かつ状況を参照する特徴を帯びたものではなくてはならない、ということだ。「話しかけの交感」「ハイン・テーニ」が境界例として、一方が純粋な発話行為かつ対話の限界になり、もう一方が発話行為でも対話の限界でもないものとして語られているのは、そのためである。

■ここで、我々が先送りにしていた問いを再び取り上げるとしよう。トドロフは「異国」社会の研究者として、マリノフスキーの他に誰を想定しているのか。この時代すでに人類学者が研究対象を求めて世界中に旅立っていたことを考えれば、その指示対象を定めるのは難しい。しかし発話行為論という視点から考えると、異国社会の研究者の一人としては、マリノフスキーとほぼ同時代に活躍した英国のエジプト語学者、アラン・H・ガーディナー (Alan H. Gardiner 1879-1963) を忘れることはできない<sup>17</sup>。近年、言語学史においてガーディナーの見直しがなされているが、これは『言葉と言語の理論 The theory of Speech and Language』(1932)の著者である彼が、語用論の一つの源泉を作ったと見なされてきているからである。ディスコース理論の発展史に豊かな内容を提供す

かった」とするハイン・テーニは、バンヴェニストがここで簡単に説明しているものとは多少のずれがある。

<sup>16</sup> « La forme et le sens dans le langage », *Le langage II* (Société de Philosophie de la langue française, Actes du XIII<sup>e</sup> Congrès, Genève, 1966), Neuchâtel, La Baconnière, 1967, pp. 29-40, repris dans PLG2, pp. 215-238.

<sup>17</sup> マリノフスキーとガーディナーはお互いよく知った間柄であり、ことばの語用論的側面を論じる際、双方が引用をしあっている。なお『言葉と言語の理論』は対象言語をほとんど英語に限っており、その意味で「原始言語」を追求したマリノフスキーとは違って、一般言語学の語用論となっているのである。一方、この一般言語学への逸脱に関して、言語学者たちからは芳しくない反応もあった。メイエは1932年のバリ言語学会紀要の書評欄で、はっきりと落胆の意を述べている (A. Meillet, « Compte-rendu de *Speech and Language* », *Bulletin de la Société Linguistique de Paris*, 1932)。

るこの本の全般に触れることはやめて、発話行為論との関連で一部を検討することにしよう。

この大作では、一般理論の部の第1章が「ディスクールとそのファクター」に割かれ、バンヴェニストのディスクール論との共通点が至る所で見受けられるのだが、その一節に「ディスクールの機械的要素」と題される文章がある。この「ディスクールの機械化」(ガーディナーは「ディスクールの化石化」とも言い換える)のなかには、「ステレオタイプの文句」「成句表現」「特有言語」の3つが整理されている(p.44-48)。最初のステレオタイプの文句とは、ほぼマリノフスキーの「話しかけの交感」で描写されたタイプのことばに相当する。ここでガーディナーはマリノフスキーの「話しかけの交感」を参照しながら、こう語る。「このような文は、確かにあることを意味してはいるのだが、一方で、質問も返答もまるで自動人形の機械的な発話のように思われる。言われることは問題ではない。話題となるものは慣用的で、それはコンタクトをとるための手段にすぎないのである」。その他、「成句表現」はすでに出来上がった表現のことで、これらの表現中に見つかる語それぞれには、ほとんど意味はない。「特有語法」とは歴史のうちに各言語が養ってきた表現法のことで、例えばフランス語の否定(ne...pas)や、冠詞の用い方などが挙げられている。

このような機械化はなにも特異なプロセスではなく、人間活動に固有の現象である、とガーディナーは説明する。「最初は目的を与えられ、有効性を持っていた行為から抜けて、習慣は成長するのである。時間がたつと、そうした行為は単に表面的なものになってしまう」。しかし化石を発掘して、その原型を探り出せるように、歴史的に辿っていくと、このタイプのことばが歴史的に動機づけられ、目的をもった行為であったことがはっきりするのだ。ガーディナーは最後にエジプトのことわざを引用している:「語は口から出る息にすぎず、人を飽き飽きさせる。語はお金がかからないのに、人がその用法をだし惜しんだのは驚くべきことだった」。古い用法が積み重なるのは早いのだ、とガーディナーは付け加えている。

ガーディナーが「機械化」「化石化」という用語を持ってきたのには訳がある。「機械化」とは「話しかけの交感」タイプのことばを指すもので、個人的特徴、オリジナリティを欠くディススクールを比喻している。一方「化石化」と言い表されているのは、むしろ「成句表現」の方で、ここには時間の積み重なりによって言語的意味を失い、社会的・文化的文脈に頼らなければ意味をなくしてしまうディススクールが問題とされているのだ。

ここで我々はバンヴェニストの短い一節を思い出すにはいられない。「分析哲学とことば」(1963)<sup>18</sup>において遂行文を考察する際、バンヴェニストは次のように述べる。

もっとありふれた決まり文句のなかに、遂行的発現のなごりを見つけることもできよう。「こんにちは bonjour」の完全な形は「わたしはあなたにいい一日を願っています Je vous souhaite le bon jour」であり、これは魔術的意図をもつ遂行文がその荘重さと原始的効力を失ったものである。しかし古くさくなってし

<sup>18</sup> « La philosophie analytique et le langage », *Les Études philosophiques*, n°1, janv-mars, 1963, P.U.F., repris dans *PLG1*, pp.265-276.

まった遂行文を今日では廃れた用法の文脈のなかで再活性させるというのは、また別の仕事になろう。このような発掘作業を試みるよりかは、いま使われていてすぐにも分析できる遂行文を選んだほうがよいだろう (PLG1, p.271)。

日常的な決まり文句のうちに、遂行文のなごり（そして魔術的意図のなごり）を指摘しつつ、バンヴェニストはその発話行為としての役割に注目せず、今日明らかに遂行文と分かる文の分析を選ぶ。なぜなら遂行文を考察するこの論文では、はっきり分かる形で遂行的役割をもつ文のみが、発話されたときに「行為」として認められるように捉えられているからだ。つまり遂行的役割を持たない発話行為は、行為としての面に焦点が当てられていないのだ。ここでの発話行為は遂行的役割あつての発話行為なのであり、「話すという行為」自体はほとんどないがしろにされていると言っていい。彼が遂行文の一回性、出来事性を強調するとき、それが発話行為そのものから来ていることは、忘れられているのである。決まり文句に対するバンヴェニストの態度に曖昧なところが感じられるのも、発話行為と遂行的発話の境がバンヴェニストのなかではっきりとしていないからである。ガーディナーが、「ディスクールの機械化／化石化」という表現を用いつつ、習慣化し変容した発話行為に読者の目を向けるのとは逆に、バンヴェニストは、この廃れた遂行文、決まり文句から目をそらそうとする。ここでもやはり「決まり文句」はバンヴェニストにとって躓きの石となっているのである。

■しかしこの曖昧さと相容れない、まったく別の態度が現れるのが、「名詞文」(1950)<sup>19</sup>という論文である。この論文は、「発話行為 énonciation」という用語が初めて（複数形で）現れることでも重要である。ここで彼は名詞文の従来の定義をしりぞけ、動詞を持たない特殊な文の性格を新たに求めようとする。「名詞文は、直接話法になっている箇所、しかも“諺”タイプの平叙を述べるためにしか用いられない」。「名詞文は、絶対的平叙に適しているので、論拠、証拠、典拠の価値をもつ。働きかけ、説得するためにこれをディスクールの中で使うのであって、何かを知らせるためではない。それは時を離れ、人物や周囲の状況からも離れて、真理として述べられる事柄である。それゆえにこそ名詞文は、さらに柔軟な用い方をされるようになってからも、格言や諺のような発話行為 (énonciations) の仕方に適し、またそういうものに用法を局限する傾向を示すのである」(p.165)。

ここにおいて、格言や諺が発話行為の一つのタイプとみなされていることに注目したい。しかもこの論文では、バンヴェニストは名詞文を「動詞形をもたないがゆえに、時を超越した定義の表現であり、また人物や周囲の状況からも離れているからこそ、真理の典拠として、ディスクールのなかで用いられる」と述べているのである。つまり格言や諺、決まり文句といった様相をとる名詞文は、実際の発話状況への参照指示を全く欠いているがゆえに、逆説的にも、状況に左右されない典拠となり、発話行為として現れるというわけだ。名詞文では言表の意味が問題なのでなく、発話の「時空を越えた」性格、すなわち格言的性格が重要なのである。

ここでは先に見たハイン・テーニの議論とは全く別の論理が働いているといつていい。

<sup>19</sup> « La phrase nominale », *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, XLVI (1950), fasc.1, n°132, repris dans PLG1, pp.151-167.

ハイン・テーニが発話行為でも対話でもない、と言われたわけは、それが遊戯であり、諺の応酬であったため、つまり発話状況への参照指示をもたないものだったからである。もちろんハイン・テーニと名詞文の文法的性格はまったく違うだろう。だがこの発話の「時空を越えた」性格、格言的性格、「権威のあることば」という特徴は、両方に当てはまることなのだ。それゆえ、名詞文が発話行為の一タイプとされ、ハイン・テーニが発話行為の外に置かれるというのは、釈然としない。ここでは20年を経た後、バンヴェニストの発話行為概念の境界線が動いた跡をはっきりと見て取れる。

バンヴェニストが「発話行為」という概念に注目し始めた時期に、この論文、「名詞文」が書かれているのは興味深い。その一年前に執筆された「婉曲話法・昔と今」(1949)<sup>20</sup>においては、「発話行為」という用語は出てこないものの、ギリシア語源にさかのぼって「婉曲話法」という用語自体を考察しながら、バンヴェニストは元来この語が「縁起のよい言葉を発する」という意味であること、それが「忌まわしいことを言わない」「沈黙を守る」という意味に変換されてきたことを説明して、こう述べる。「語の意味の上には文化的用法の行為がはっきりと現れている」(p.310)。ここで行為と言われているのは、文化的状況のなかでの話すという行為、つまり発話行為に他ならない。様々な文化的状況のなかに投げ出された発話行為は、回を重ねるうちに語の意味を作り替え、文化の歴史を語のなかに貯蓄していくのである。婉曲話法といった一種の「決まり言葉」は、ここでもやはり発話行為、あるいは発話行為の化石として考えられているのである。「婉曲話法を理解するためには、話されたディスコースのなかでできる限りその用法の条件を再構成しなければならない。[中略]状況のみが婉曲話法を決定するのである」(PLG1, p.310)。すでに決まり言葉、慣用表現と化している婉曲話法は、言語的意味のままでは受け取れず、社会的文化的状況に置いてみないと理解できない。分析のためには、発話行為がなされた状況に戻る必要があるのだ。

ここでいったんPLGから離れ、『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』<sup>21</sup>に視線を向けてみよう。というのも、この比較言語学の大家からは、「行為としての話すこと」に関する分析が少なからず見つかるからだ。それが顕著なのは、法に関する制度語彙を分析している箇所である。例えば「iusおよびローマにおける誓約」の章を取り上げてみよう。ラテン語iusは対応語としてインド・イラン語派のyohとyaosを持つが、この二つは\*yausから来ている。ここで我々は次のような記述に会うことになる。

次に、インド系言語とイラン系言語における\*yausの用法の違いに目を向けておこう。ヴェーダ語のyohは願望表現で、繁栄や完全性が保証された者に向けられる用語となっている。したがって、yohは発話されてはじめて効果を発揮する。一方アヴェスタ語のyaosはそれと異なる。つまり、yaosとda-「置く、為す」との結びつき自体は、yaosが単に話されるべき言葉だけでなく、実現される状態をも意味したことを示しているのだ。\*yausの概念はこうして「為されるべき」、他方では「話されるべき」こととなる。この意味上の相違は、「行為」がしばしば「言葉」から成り立つような法や儀礼の領域に重要な影響を及ぼす (II, p.113)。

<sup>20</sup> « Euphémismes anciens et modernes », *Die Sprachen*, I (1949), p.116-122, repris dans PLG1, pp.308-314.

<sup>21</sup> *Le vocabulaire des institutions indo-européennes*, t.I et t.II, Minuit, 1969. なお訳出にあたっては邦訳を参照した。『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』一、二巻、前田耕作監修、言叢社、1986年。

ここで注目したいのは、バンヴェニストが発話行為の状況を、言語分析を通して再現しようとしていることだ。その際、宗教的儀式においては、「言葉」と「行為」はおなじものの繰り返しだということにバンヴェニストは気づいている。トロブリアンドで魔術師が「魚を食べる」と言いつつ魚を食べているように、古代の祭司は為されるべきことと話されるべきことを同時に行ったのである。このような儀式は、ローマにおいては法概念の基礎を作ることとなる。問題の概念*ius*は、もともと「法」というような抽象的概念ではなく、むしろ慣用句であり、それを口に出し、宣告することは、「法を行うこと」と同義であったのだ (II, p.114)。

続いてバンヴェニストは「*ius iurare*」という表現を取り上げ、まずエルヌー＝メイエの辞書の翻訳表現「(人)を拘束する聖なる定式表現を発言する」から出発する。分析を進めるに従って、「誓約する」と理解されているこの動詞「*iurare*」は、神の加護のもと自らを捧げる行為 (*sacrifice*) とは意を大分異にするものだということが明らかになってくる。実は「*iurare*」は「言挙げされた慣用的表現を反復する *répéter la formule prononcée*」(p.118) ことなのである。

誓約には参加者が二人必要である。先に *ius* を唱える (*praet uerbis*) 者と実際にこの慣用句を復唱する (*iurat*) 者である。この慣用句は *ius iurandum* 「言明すべき定式表現」と呼ばれ、「*qui praet* [前を進む]」者がそれを発話したのちに復唱されなくてはならず、それは誓いの内容を慣用句を用いて定めた表現に他ならない。[中略] こうした一連の分析によって、*ius* 自体の検討を通して分かったことが *iurare* にもまた確認できる。つまり *ius* は決まり文句、ここでは誓約者が従うべき所作を示す定文や、そのものが遵守すべき規則を指すのだ。これに対し *ius iurandum* はその手続きの性質や、発話行為 (*l'énonciation*) の厳粛な性格を表すもので、誓約文自体を表すものではない (II, p.118-119)。

言語分析を通して、古代社会で「法を行うこと」が「決まり文句を繰り返すこと」であったと証明しているバンヴェニストは、同時に「決まり文句を繰り返すこと」がれっきとした「発話行為」であることを認めているのである。この発話行為をもって、二人の当事者は法の行為としているのだ。

トドロフが関わっているヨーロッパ諸語の専門家がバンヴェニストなのかそうでないのかは別にして、バンヴェニストの仕事のなかでは、一般言語学に関する論考よりもむしろ比較言語学の論考のなかに、「行為」と「話すこと」の一体化を見ることができる。またそれが「慣用句」や「権威のあることば」「決まり文句」の分析から生まれているのが以上のテキストから読みとれる。

■ここでマリノフスキーやガーディナーがどのように「行為としてことば」に近づいていったのか、もう一度振り返ってみたい。

メラネシア社会を研究する人類学者にとっては、彼らのことばは未開で原始的であり、十分に発達していない幼児の言語のように未熟な状態であると同時に、現代西欧社会のことばが忘れかけていることばの原初段階について教えてくれる貴重な資料でもある。この西太平洋の住民たちにとって、ことばが経験と密着し、行為そのものと同じように捉えられるという事実は、すなわち英国社会のことばがもともともっていた原型の性格を指し示すものである。ことばとはよつてもともと、社会のなかで交換される行為であり、また社会における実際の経験と切り離せない、同時的なものである。リズムカルな魔術のことばに言語的意味がほとんどなく、言葉と行為が溶けあっているのだ、という観察から、また大して内容のないことばを交わすことで社会的コンタクトを取っている、という観察から、マリノフスキーは「発話行為」という行為を社会的なものとして提示しているのである。

一方ガーディナーは、マリノフスキーの発見から出発して、ディスクールの機械化／化石化という表現を用いつつ、意味のないことばや決まり文句を考察する。古代のエジプト語文法家にとって、ほとんど意味のなくなった文や決まり言葉を手に取り、その古い用法を探っていくことは、すなわち発話行為 (act of utterance) がアクチュアルであったその時の状況を再構成していくことに他ならない。これらのディスクールは、その機械化／化石化現象のゆえに言語学者の注目を集め、発話行為への考察を深めるきっかけとなるのである。

バンヴェニストの場合はどうなのだろうか。

実は彼が発話行為という行為を認める契機を作りだすのも、やはり「諺」や「格言」タイプのことばの分析なのである。名詞文に代表されるように、決まり言葉や格言、権威ある言葉は、発話の表現そのものと発話状況とが密着しておらず、また発話者と発話そのものの繋がりも薄いために、逆にその表現を「引用する」という行為が問題となってくるのだ。「話しかけの交感」がそうであったように、「話す」という行為が行為と認められるのは、その話す内容に個人的指標がなく、指示参照を欠いているかに見える時に、もっとも顕著なかたちで認められるのである。名詞文や婉曲話法の文は、「行為としてのことば」という概念を言語学者に教える一つの原動になったのである。

一方、発話行為という概念がしだいに深められて、指呼詞の研究、動詞体系の研究と共に発展していくとき、発話の意味の問題は、ことばにおける主体性や指呼詞の問題と一緒に、発話行為から切り離せないものとなる。1970年には発話行為は次のように定義されている。「発話行為は、個人が使用することで、言語 (langue) をはたらかせるということである」「個人的実現として、発話行為は、言語との関係で、専有化過程として定義できる。話し手は言語の形式的装置を我がものとし、一方で固有の指標によって、もう一方で付随的な方法によって、話し手の立場を表明する」(PLG2, p.82)。ここでは個人的使用行為が、話し手の立場を表明することが中心になっている。決まり文句、諺、書かれた言葉、格言といった現象は、まずマージナルなものに、ついには「発話行為」の境界外に置かれてしまうのだ。

魔術のことば、原始言語、幼児のことばというマージナルな地点から出発したマリノ

フスキーが、社会的行為としてのことばという命題を強く主張する。それを約50年後、1970年に引用し、発話行為という概念を広く世に送り出そうとしたバンヴェニストの思考には、「話しかけの交感」というタイプのことばは発話行為の境界例のように映ったことであろう。しかし彼自身の発話行為概念の源泉を比較言語研究の中に辿っていくと、その源泉に、「原始言語」、魔術的なことばの考察を見ることができる。バンヴェニストが発話行為という用語と概念を発見しつつあった論考のただ中に、我々は諺と呪文の残響を聴くのである。